

希望を耕す

まちの後継者

東京大学 特任教授・建築学

松村秀一

Shuichi Matsumura

突然の貼り紙

文京区本郷、東京大学の周辺は、平成初期にはペンシル・ビルやワンルーム・マンションへの建替えが増えたものの、平成後半は落ち着いて、そうそう工事現場に出くわすこともない。だから、一見まちは変わっていないように見える。ところが、建物の落ち着きとは裏腹に、まちは変わってしまったている。

この界限には、私が学生になるずっと前からやっていた蕎麦屋が何軒もあった。私には、ゆったりとした気分で蕎麦を味わいたい時に必ず入る店があった。ところがである。いつものように一人でその蕎麦屋に行くと、店の中にあかりはなく、入り口にささやかな貼り紙がしてあった。「長い間有難うございました」と閉店の挨拶が書かれていた。程なく改装工事が始まり、そこは今時のラーメン屋に姿を変えた。

その蕎麦屋から一〇〇メートル程のところには、これまで私が学生になる前から営業を続けてきた、深酒要注意の焼鳥屋がある。閉店時間が遅いこともあって、はしご酒になると幾度となく管を巻きに行った。そこで建築学科の他の研究室の

一群と遭遇することもあり、それも楽しみの一つだった。ところがである。ここにもまた貼り紙が出た。「長い間有難うございました」と。

現代日本に共通する事情

ここ数年本郷界隈では、長らく親しまれた店が惜しまれながらも次々と閉店してきた。蕎麦屋と焼鳥屋だけではない。私が足繁く通った店だけでも、老舗パン屋、昭和の香りを色濃く残すケーキ屋、モーニングの美味しい喫茶店、研究室の飲み会の定番だった鉄板焼き屋、構内での花見にも岡持ちで出前をしてくれた中華料理屋、著名な文豪たちも屋台の頃に食していたというおでん屋、江戸時代から「本郷も〇〇まで」は江戸の内」と川柳にまで出てきた雑貨屋等々、数え上げると少々悲しくなる。

平成初期だと「ああ建替えたな」「高いのが建つのだな」という理解で貼り紙を見ていて大きな間違いはなかったが、今は違う。どこも建物はそのままで、シャッターが下ろされたままになるか、先述した蕎麦屋のように、全く違う業種が開店する。結構多いのは、他のまちでも見かける全国展開型の飲食店や携帯電話の店舗。

市場調査が十分でない場合には、程なく閉店というケースもあり、昨今のまちの思い出は安定しない。

久しぶりに来室するような卒業生が、「大学周辺は変わりませぬね」と言った後、よく行った定食屋や居酒屋の名前を挙げる度に、「ああ、あそこはもうないよ」と言われ、一目だけではわからないまちの大変化にショックを受けるということもある。

建物を建替える訳でもなく、閑古鳥が鳴いている訳でもなく、そのまちをそのまちたらしめていたコンテンツが消え去っていく。その原因は多くの場合、店主の高齢化と後継者の不在というところだ。本郷に限らない、同じような話は、全国のそこそこ聞く。

まちのマネジメントと店のマネジメント

二〇一六年の暮れに起こった糸魚川の火災は記憶に新しい。二カ月程経った頃だったと思うが、建築防火の大家、早稲田大学の長谷見雄二先生からお話を伺う機会があった。

出火元は中華料理店で、店主の親爺さんがコンロの火をつけたままちょっと店を離れた間の

出来事だったという主旨の報道を覚えている。先生から伺ったのは、私が理解したところでは次のようなことだ。その店主は既に七〇歳を超えていて、今は一人で店を切盛りしているが、数年前には他にも働く人がいた。そのもう一人いる時だったら、こういう火災は起こらなかっただろう。火災にあった糸魚川のようなまちは日本中にあるが、木造建物を中心に構成されたそれらのまちを全て耐火建築物に建替えるのは不可能だ。そうした中で、同様の火災が起らないようにする上で最も深刻で難しいのが、まちの超高齢化と人口の減少である。もしこの中華料理屋で誰かがこの店主を手伝っていたら、大きな火災にはならなかっただろう。

家業でない持続可能なまち

私たちのような建築屋は、建物の並びこそがまちだと思いがちだ。中身が閉店しようが、変わろうが、建物がそのままである限り、知ったこっちゃない。そういう感覚のところがある。が、それは間違いだ。まちは、建物以上に、建物が埋め込まれるコンテンツでできている。長い間、それは家業としての継続性で支えられて

きたし、変わることも少なかった。だから、建築屋はそのそれぞれの家代々を得意筋として建物の注文にだけ気を付けていれば良かったのだ。その継続性を持った得意筋から注文があれば、建物を造り、まちを造っているという実感すら得られただろう。

だが、現代のように家業の後継者がおらず、まちのコンテンツが消え去る時代になると、これまで通りの建築屋は無力感を抱えて佇むしかない。建築屋も建物のコンテンツのこと、まちのマネジメントのことを考え、自身の領域に組み込むべき時代になっているように思う。でなければ、時代に応じた希望は耕せないだろう。

私は、これまで家業であったコンテンツを、意欲のある他人に継承してもらおう気分と方法を創り出すことが重要だと考えている。そのためマッチング・サービスや人材育成の場づくりが追求されるべきテーマだ。

あの蕎麦屋と焼鳥屋も、おそらくは後継者がいなかったのだろうが、蕎麦屋或いは焼鳥屋をやりたい人は日本中に大勢いるのではないだろうか。学問の継承性を重んずる大学がよくやる公募を試してみるのも良いかもしれない。